

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19401045

研究課題名（和文） 東南アジア大陸部における生成的コミュニティ

研究課題名（英文） ‘Communities of Becoming’ in Mainland South East Asia

研究代表者

田辺 繁治（TANABE SHIGEHARU）

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：00045262

研究成果の概要（和文）：東南アジアの新しいコミュニティはしばしば、移動、排除、放逐によって発生する。そこでは人びとは多様な欲望やニーズを達成するために、伝統的な制度や規範に依拠するよりも新たな協同性を構成していく。それらのコミュニティは周縁的であり、国家、行政、企業やNGOなど外部勢力との対立、闘争、交渉や連携を経験する。その過程においてそれらのコミュニティは、内部の多様性を保存しながら自ら「生成変化」することで存続しようとする。

研究成果の概要（英文）：Currently emerging communities in South East Asia are often formed as a result of migration, relocation or expulsion. The people in these communities, in order to attain diverse desires and needs, try to constitute new types of association rather than relying on traditional institutions and norms. These new marginal communities experience a variety of conflicts, struggles, negotiation and cooperation with outer forces such as the state, its agencies, enterprises and NGOs. In this process these communities, maintaining their internal multiplicity, intend to survive through ‘becoming’ other.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2008年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2009年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
年度			
年度			
総計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野：社会人類学

科研費の分科・細目：文化人類学

キーワード：文化人類学、社会学、コミュニティ、ニーズ、生成変化

1. 研究開始当初の背景

東南アジア大陸部、特にタイなどにおける従来の社会科学的なコミュニティ研究は構造的、システムの捉え方に基づくものであり、そこには主として二つの流れがあった。第一は、第二次世界大戦後のアメリカの文化人類学的な社会システムの比較研究であり、タイ社会は「緩やかに構造化された社会システ

ム」という概念によって描かれ、日本などの強く規範化された社会システムと対比されてきた。第二は、イギリスの社会人類学者 S. タンバニアのタイ農村における仏教や精霊信仰の研究によって代表される 1970 年代以降の構造主義的な研究であり、コミュニティにおける人々の宗教的世界観、価値観や実践は、要素間の対立する関係の集積として全体

論的な構造をなしていることが主張されてきた。

こうした社会システム論と構造主義の流れを受けた東南アジア地域のコミュニティ研究において、コミュニティは国民国家などの大きな社会編成のもとに組み込まれながらも、独自の社会組織や文化的特徴を備えたある種の全体的な構造やシステムをもつものと考えられてきた。しかし、境界によって囲まれた場所的なコミュニティ、そこに形成された文化やアイデンティティを一体的なものとして捉えようとする従来のコミュニティ概念は、20世紀末からの人々の移動、流動、排除の激化や、実体的な社会関係を超越して想像的に構築されるコミュニティやネットワークなどの出現によって根本的な見直しを迫られるようになった。

そのような社会的現実の急激な変動を背景にしながら、中心部の「伝統的」農村コミュニティ、あるいは周辺に位置するマイノリティに関する近年の研究は、国民国家とその行政機関、国際機関、NGO やその他の勢力との関係において変動する姿を記述するようになった。しかし、それらの試みの多くも、人々の生の新たな欲望とニーズを直接的に把握し考察するよりも、むしろそれらを従来のコミュニティ概念の延長線上に捉えようとする限界をもつものである。

そこでこの研究は、従来のコミュニティ研究の対象にとどまらず、多様で多角的な志向性と組織形態、新しい協同性と社会性をもつ集団、アソシエーション、ネットワークなどの近年における出現に注目する。そして、これまでのコミュニティ概念にはおさまりきれない人々の欲望、想像力、潜勢力を明らかにし、それらによってコミュニティが変化していく力動的な過程を捉えようとする。この研究は、コミュニティを従来の「存在」するものとしてではなく、何ものかに「成る」、つまり自らを「生成変化」させていくものとして描こうとする新たな試みである。

2. 研究の目的

この研究の目的は、今日のグローバル化とモダニティの深化のなかで、東南アジアにおける新しいタイプのコミュニティの出現とそれらの特徴づける協同性と社会性の実態を記述し、そこに貫流する人々の欲望、ニーズや想像力が彼らの現在と未来における新たな生の様式を生成していく動態を探求することにある。

本研究では、このような新しいタイプのコミュニティを「生成的コミュニティ」と呼ぶが、その主な特徴は次の三点である。

- ① 生成的コミュニティでは、その内部に個人の多様で差異化したニーズ、欲望、想像力、価値評価が確保され、それは帰属

性や同一性を基準として構成される従来のコミュニティの性格とは全く異なっている。

- ② 生成的コミュニティは、内部の多様性と差異を維持しようとするが、それを均質化し同一化しながら統治しようとする勢力、特に国民国家やその他のエージェンシーに対する闘争、抵抗、あるいは交渉の局面につねに晒されている。
- ③ 生成的コミュニティがそうした権力関係のなかにありながら存続するためには、状況に即応しながら自らの存立の諸条件を解釈し再検討しつつ、多面的に自らを変化させ作り替えていく、つまり生成変化することが必要である。

本研究では、以上の点に注目しながら、東南アジア大陸部のタイやカンボジアなどにおける生成的コミュニティの実態を具体的事例に基づき明らかにする。

3. 研究の方法

代表者、分担者、および海外共同研究者各人が、対象コミュニティにおいてフィールドワーク（現地調査）を実施し、それらの事例研究で得られたデータを比較検討しながら生成的コミュニティの実態を明らかにする。対象とするコミュニティは以下の11件である。

- ① 北タイにおけるHIV/AIDS自助グループ（田辺）
- ② 北タイの社会的林業における環境保全運動（松田）
- ③ 東北タイにおけるベトナム系移民コミュニティ（高井）
- ④ カンボジアにおける紛争後の社会再統合（阿部）
- ⑤ 北タイにおける民間治療師ネットワーク（古谷）
- ⑥ 東北タイ出身女性の移動労働者コミュニティ（藤田）
- ⑦ タイにおける新仏教運動「サンティ・アソーク」(Apinya)
- ⑧ 北タイ、カレン族のクーバー（仏教聖者）崇拝コミュニティ（Kwanchewan）
- ⑨ 東北タイにおけるプータイの治療カルト（Malee）
- ⑩ 北タイの観光都市パーイにおけるカレン族コミュニティ（Duangjai）
- ⑪ 東北タイにおける農村コミュニティと土地権闘争（Surasom）

フィールドワークにおいては、年度ごとに共通の重点的調査課題を設定した。すなわち、1年目は、コミュニティにおける人々の欲望や生存のニーズの多様性と差異化の実態に注目しながら、それらがいかに語られ、解釈

され、実践されるのかを調査することである。2年目は、人々の欲望やニーズを実現させる過程で直面している問題を把握し、それらをめぐる国際機関や行政機関、NGOなどの介入や連携に注目し、そこに発生する対立、抵抗や交渉などの局面を調査することである。そして、3年目は補足的調査を実施することとした。

また、各研究者による個別的調査・研究と平行して、本研究における背景知識を共有し、互いのデータを比較検討するために、1年目は国内において研究者2名を招聘し、研究会を開催した。2年目および3年目にはタイのチェンマイ大学において中間報告会と「生成変化」概念についての勉強会を開催した。

最後に、以上のフィールドワークや研究会で得られたデータと知見をふまえ、全員が論文を執筆し、タイのチェンマイ大学において成果報告会を開催した。そして、各報告の関連分野を専門とするコメンテーターを招聘し、一般聴衆も含め、今日のグローバル化する社会における生成的コミュニティの実態と意義について参加者全員で議論した。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

この研究では、コミュニティが内部の差異と多様性を保持しながら、外部からの介入に対する抵抗や交渉のなかで多面的に自らを生成変化させていく過程に焦点をあてる。この研究の主な理論的、実証的な成果を、以下のごとく3項目にわたって提示してみる。

① コミュニティの構成

この研究が対象とするコミュニティとは、均質で同一的な集合性を意味するのではなく、個々人のあいだで差異化した多様な欲望、ニーズや想像力を内包する実体である。それはすでに構成された制度や規範ではなく、人びとが自らを構成していく過程を指している。ここではそうした新たなタイプの集合性を「生成的コミュニティ」と呼ぶが、その典型的な事例は、東北タイ農村からの移動労働者たち、東北タイのベトナム系移民コミュニティなど、国内外を含む移動の激化と流動性のなかで形成されたコミュニティのなかに認めることができる。人びとの移動はしばしば元のコミュニティからの排除や放逐によって発生する。ダム建設や森林国有地化によって追放されクーバー（仏教聖者）のもとに結集したカレン人、新仏教サンティ・アソークのコミュニティに吸収された都市の下層中間層や農村の貧困層、また HIV 感染で追放され北タイのエイズ自助グループを形成した人びとなどがその例である。

コミュニティが構成されていく過程は、さ

らに森林や耕作地などの資源管理をめぐって浮かびあがってきた。北タイ農村の「コミュニティ森林」、北タイ・パーイのカレン人の森林管理、あるいは東北タイ・ウボンラーチャターニーの貧困農民の土地権をめぐる闘争などがその例である。それらにおいては、NGOの資源保護論や資本の近代的所有権に対して、農民独自の生活・生計戦略としての森林・土地利用の権利に関する主張が顕著に見られる。こうした生活・生計戦略の展開は、伝統的な知恵の復興であるよりも、人びとが資本や政治権力に対峙しながらコミュニティのもつ協同性を自ら活用していく過程として捉えるべきである。

② コミュニティと外部

人びとが欲望を解き放ちニーズを実現させる過程において、コミュニティは国家、行政、企業やNGOなど外部との対立、闘争、交渉や連携を経験する。すでに見たように、北タイにおける森林の資源管理をめぐる外部の開発企業とのあいだで、また東北タイでは、土地利用権をめぐって外部からの移住者とのあいだで対立がつついている。こうした資源管理をめぐる対立では、国家の行政機関への訴えのみによる解決法はかならずしも有効とは限らず、コミュニティ内部での生活戦略に立返るとともに、NGOや草の根運動、研究者やメディアなどとの連携による抵抗と交渉の必要性が強く示唆される。

この研究が対象としたタイとカンボジアのコミュニティの多くは、その形成や展開においてNGOの活動と関係している。国際NGOにしばしば見られる硬直化した近代人権思想や合理的環境保護論は、コミュニティの差異化した多様なニーズを必ずしも体現するものではない。他方、タイにおいて1980年代から急速に形成された国内NGOの活動は、この研究の多くの事例に見られるように、新しいタイプのコミュニティが内部の多様性を保存しながら外部の権力に対して抵抗し交渉していく過程で不可欠な要素となりつつある。

③ コミュニティと生成変化

この研究が対象とする新たなタイプのコミュニティは、ある種の寄せ集め的な「布置 agensment」であり、そこでは身体的な情動、および言説的な表出の双方が人びとの関係性を形作っている。この布置としてのコミュニティは、しばしば周縁的な位置を占めながら生成変化することで、マジョリティとは異なる新たな生とその実践の様式を展開していく。

東北タイのプータイ人の霊媒コミュニティでは、慢性病に悩むメンバーに精霊が憑依するが、その人はしだいに精霊と共存する身

体を獲得し霊媒へと生成変化していく。そこには病者・霊媒・コミュニティ内外の人びととのあいだの情動的コミュニケーションが強く働いている。また北タイのクーバー崇拝コミュニティでは、人びとはクーバーの身近に寄りそってその力を得ようとし、そこには情動的な相互作用によって互いに強め合う関係が見られる。

さらにこの研究が注目したのは、多くのコミュニティでは情動的作用と言説的表出の双方が一体となって新たな実践の可能性が追求されることである。カンボジアでクメール・ルージュ特別法廷への人びとの参加を支援する NGO は、虐待被害者の記憶を蘇らせることによって情動的な結合を作りだすとともに、メディアを通じて権力介入による解体の危機を乗り切ってきた。北タイの民間治療師のネットワークは、キャンペーンをとおして民間医療の可能性を追求するが、そこには「人助け」という情動的、贈与的な医療倫理が強く底流している。また北タイのエイズ自助グループは、ウイルスと社会的排除と闘うために多様なキャンペーンを展開するが、グループ内外での情動とケアの関係性の構築がそれを支えている。

以上のように、この研究は、今日の東南アジアの新たなコミュニティ現象が直面している諸局面を明らかにするという所期の目標を達成できたと考える。

(2) 研究成果の国内外における位置づけとインパクト

この研究の最終段階である 2010 年 3 月 6～7 日、チェンマイ大学社会科学部において成果報告会を開催した。そこではこの研究の代表者、分担者、タイ側研究協力者など 11 名、タイ人コメンテーター 6 名、およびその他多数の参加者を交えて活発な討議が行なわれた。

そこで確認されたこの研究がもたらすインパクトは、以下の点である。

- ①「この研究は、新しいコミュニティという集合のなかで人びとがいかに行為し、そこにいかなる関係性や協同性を形成していくかという問いについて、フィールドワークのデータに基づく多様な民族誌的事例にわたって提示することができた。
- ②「そうしたミクロレベルの研究は、政治的・社会的な流動性と不確定性が高まるなかでのコミュニティに関する研究にとって不可欠な分析視点を提供するものであり、東南アジアを対象とする人類学だけでなく、今日の社会科学全体に対する貢献である。

この研究成果の一部は、2011 年日本文化人類学会研究大会、2011 年国際タイ研究会議な

どにて発表される予定である。

(3) 今後の展望

コミュニティの生成変化の局面に注目するならば、個人はマジョリティとは異なるマイノリティの道に突き進む。さらにコミュニティが共通の目的を追求するような「運動」に発展した場合、そこでは内部の個人の差異と多様性はいかに保持されるだろうか。今日のコミュニティの研究は、運動としての展開を視野に入れながら幅を広げる必要があると考えられる。

2010 年 3 月に開催された成果報告会に提出された論文は、すでに暫定的な形で取りまとめられ、現在、その刊行について検討中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① Tanabe Shigeharu, 'Imagining Communities: Anthropological Reflections', Japanese Review of Cultural Anthropology, 査読有, Vol.10, 2010, 3-26
- ② 松田素二, 「序 現代世界における人類学の課題 (特集 ネオリベラリズムの時代と人類学)」、『文化人類学』、査読有、74 巻 2 号、2009、262-271
- ③ 田辺繁治, 「生政治とコミュニティタイにおける保健医療の変貌」、『大谷学報』、査読無、87 巻 2 号、2008、1-23
- ④ 松田素二, 「共同体の再想像に向けて—アジア・アフリカの事例から」、『哲学研究』、査読無、585 号、2008、1-37
- ⑤ 阿部利洋, 「カンボジア特別法廷の社会的機能—あいまいな「正義」は何をもたらすか」、『大谷学報』、査読無、87 巻 2 号、2008、30-49

[学会発表] (計 2 件)

- ① 古谷伸子, 「北タイ民間治療師ネットワークにおける治療師のアイデンティティ」、『日本文化人類学会第 43 回研究大会、2009 年 5 月 31 日、大阪国際交流センター
- ② Tanabe Shigeharu, 'Futurity in Bio-Society: HIV/AIDS Self-Help Groups in Northern Thailand', 10th International Conference on Thai Studies, 11 January 2008, Thammasat University, Bangkok, Thailand

[図書] (計 5 件)

- ① 田辺繁治, 『「生」の人類学』、岩波書店、2010、318

- ② 松田素二、『日常人類学宣言！—生活世界の深層へ／から』、世界思想社、2009、343
- ③ 田辺繁治、『ケアのコミュニティー—北タイのエイズ自助グループが切り開くもの』、岩波書店、2008、215
- ④ 阿部利洋、『真実委員会という選択—紛争後社会の再生のために』、2008、216
- ⑤ Tanabe Shigeharu, Chumuchon kap kan pokkhrong chiwayan: klum phu tit chuea et ai wi phak nuea khong tai (コミュニティーと統治性—北タイのHIV感染者グループ) , Bangkok: Sirinthon Anthropology Centre, 2008, 215

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田辺 繁治 (TANABE SHIGEHARU)
大谷大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：00045262

(2) 研究分担者

松田 素二 (MATSUDA MOTOJI)
京都大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：50173852

高井 康弘 (TAKAI YASUHIRO)
大谷大学・文学部・教授
研究者番号：00216607

阿部 利洋 (ABE TOSHIHIRO)
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：90410969

古谷 伸子 (KOYA NOBUKO)
大谷大学・文学部・助教
研究者番号：20514326

(2007年度：研究協力者)

藤田 直子 (FUJITA NAOKO)
大谷大学・文学部・研究員
研究者番号：70410975

(3) 海外研究協力者

Apinya Fuengfusakul
Faculty of Social Sciences, Chiang Mai
University
Kwanchewan Buadaeng
Faculty of Social Sciences, Chiang Mai
University
Malee Sitthikriengkrai
Faculty of Social Sciences, Chiang Mai
University
Duangjai Lortanavanit
Faculty of Liberal Arts, Thammasat
University
Surasom Krisnachuta
Faculty of Liberal Arts, Ubon
Ratchathani University